

## 十 鏡面を打破し來れ

之を彼の了然尼の事蹟に見よ。彼女は武田信玄の玄孫にて、もと總と名づけ、東福門院に奉事せしが、門院崩御の後勸められて、松田某に嫁するに當り、三子を擧げなば去ることを許さるゝを以てした。二十四五歳にして三子産出の約を果したから、辭して佛門に入らんとし、當時の名僧弘福寺の鐵牛の許に赴きて、許を得んとした。鐵牛その容色の美麗なるを見て、「佛敵法敵の化物、門内に入るることならぬ」と拒絶せられた。次いで白鷗師を訪ひしも同様魔魅として許されなかつた。彼女は殘念で堪らない。折角法を求めんとして此處まで來りしものが、化物として入れられぬ。己れ厄介な我面よと、乃ち民家に入り、鏝を烙いて我面にあて、顔面を焦爛し、眞の化物面になつて、再び白鷗師を訪ふた處。和尚驚いたの何のて、般若の鬼面も斯くやと思はるゝばかりなる上に、昭々として求道の赤誠が顯れて居る。和尚熟々感じ入つて漸く尼たるを許したと云ふ。其時鏡裏に書き記したのが斯うである。

「昔遊<sup>二</sup>宮裡<sup>一</sup>燒<sup>二</sup>蘭麝<sup>一</sup>、今入<sup>二</sup>禪林<sup>一</sup>燎<sup>二</sup>面皮<sup>一</sup>、四序流行亦如此<sup>レ</sup>、不知誰是個中移。生ける世に捨てゝたく身やうからまし、遂に薪と思はざりせば」。

我等了然の壯擧は及ばずとも、精神上三つの顔面だけは燒捨てねばならぬ。蓮師は深く之を嫌はれた。曰く我身あり顔。曰く我心得顔。曰く我物知り顔。此三を燒捨てゝ、須らく精神上のお多福にならねばならぬ。「本願にあふた福こそ嬉しけれ、鼻はひくうて頬(法)は高うて」。あゝ友よ。至心に精進に道を求めて止まざれ。「面の皮は薄く、足の皮は厚く」。働いて足の皮を厚くし、耻を知つて面の皮を薄くしたいものである。徒に空想に耽つてはならぬ、着實堅牢の氣象を養へ。人ありて問うて曰く「純清絶點の時如何」鏡には一點の曇もないが、これで好からう。古人は答へて云ふ「猶ほ是れ眞常の流注」僅

な迷が残つてゐるぞといふ心持。それではまだ是以上進むべき道があるのかと云ふので、其人が「向上別に事ありや」。曰く「在り」。「如何なるか是れ向上の事」。答へて曰く「鏡を打破し來れ、吾、爾と相見せん」。眞に向上の事が聞きたいならば、鏡を打破して來い、貴様は一つの鏡を持つて居る。一つの見識我見を持つて居るから不可ぬ。それを打破つて來い、其の時相見するであらう。了然尼の顔に最初どんな鏡が懸つて居たであらう。必ずや彼の美貌と、虚飾とが輝いて居たに相違ない。それが鏝一挺に打破られた處、正しく眞實の法器として相見するを得たのであります。我等亦大に打破すべき鏡があるのではなからうか。

「青丹よし奈良の都は咲く花の、匂ふが如く今盛りなり」といふも「奈良七重七堂伽藍八重櫻」といふも、共に奈良朝の盛大を謳つたものである。其時の建立で音に名高い大佛様へ、或人が參詣しての歸路。門前の餅屋に這入つて休んだ。暖簾には大佛餅と太文字に染抜いたものゝ、餅は至つて小さい。不審に思つて聞いてみれば、主人の答が面白い。「夫れは其筈。貴方が大佛様の素敵滅法大きい處を拜まれ、其の眼で外の物を御覽になりますから、皆小さく見えます。餅は決して小さいのではありませぬ」。「成程、それもさうか」と合點して茶代を置いて出かけた。町を離れて田舎道にかゝると、路傍の大樹の下に、可愛らしい子供が寝かしてある。すやくと何も知らぬらしい、「可愛想にこんな罪もない者を、路傍に捨てるとは、どんな鬼心の親であらうか、酷い事をする」と、獨言をいひながら、抱き上げて懷の中へ捻ぢ込み、またそろく歩き出したところが、だんぐ重くなつて來て、とてもく堪へられない。こんな筈はないがと、取出して調べて見れば、こはそも如何に、赤兒と思ひの外、乞食の婆さんであつた。

何と大佛様を拜んで随分と眼の肥えたものである。私共の眼は漸々と肥えて行つて、最初満足してゐたことも、次第にそれでは濟まされぬ事になり馴れては珍しさが抜けて来る。あがりあがつて落處を知らぬ事になります。たゞ夫れ妄想の業鏡を打破して進め、篤直に進め、大道は坦然として我等の前に開け、本願の白道は昭々として淨邦に通ず。徒に疑怯退心を生ずる勿れ。今は時、聞思して遲慮するを要せぬ。汝の頭上正に一塊の氷雪を置いて、靜かに如來の大法を聞け。

『高僧傳』を按ずるに釋慧嵬法師は、晋の隆安年中に有名な法顯三藏と入竺した人である。頗る人生の妙味を悟つて、多くは山中に住して座禪してゐられた。すると、其の山の鬼神が、如何にもして此奴の荒膽を挫いてくれやうと、種々苦心した揚句、頭のない鬼となつて慧嵬の面前に現れた。けれど慧嵬は平氣なもの。「イヤ面白い化物！、頭が無いな。頭がないなら頭痛がせぬでよからう」。チャカされた鬼神、今度はと、腹のない化物となつて現れた。「イヤ今度は腹がないでないか。面白い、定めて腹が立たぬでよからう」とやつて、鬼神も凹んでしまつたが、今度は窈窕花のやうな美人となつて現れ。「妾は天女よ。上人のお徳を慕つて參りました。情願お側に長く」。云ひも終へぬに慧嵬、「革囊の衆穢去れ」糞袋逃げて仕舞へとやつて、鬼神の方が却つて膽を潰して仕舞つたさうな。

面白い、非常に面白い。世間の人は常に怪物に捕へられる。眼なきものは無眼の怪物に耳なきものは無耳の怪物に、乃至病魔に貧神に、所有物に襲はれて日夜に呵責せらる。悟れ、解脱せよ。塙保己一の如く肉眼者を憐むに至れ。「世の住み憂は厭ふたよりなり」。起つて道を求め、不動地に至つて、更に悠々天地に逍遙し來れ。「柿を見て家事の苦勞は思はじな澁さまされば甘さまされり」。